

## 巻頭の辞

昨今では、経済問題から原発問題に至る様々な問題に対して、立場を異にする人々がインターネットを介して幅広く意見を交換し、また大規模に集合して支配層への異議申し立てをおこなうことが日本でも世界でも珍しくなくなってきました。「マルチチュード」とでも呼び得るであろう人々の姿が少しずつ常態化しつつあります。それぞれの立場の違いをものともせず、新たな未来をともに切り開いていこうとする人々の可能性が感じられます。それは輝かしい未来ではないとしても、多くの人々がともに努力して勝ち取っていく未来という訳です。

もっとも、現在にあっても、またおそらくは未来にあっても、世界における人々の関係をマルチチュードだけに収斂させて理解することはできません。たとえば未来をもっとも先取りしていたはずのヨーロッパでは、経済危機によって国家間での経済格差が露わになり、EU などによる内政干渉が（しばしばマジョリティを中心とした）ナショナリズムの喚起＝「内破」をもたらすに至っています。他国の人々との連携、国内の多様な人々の間での連帯は必ずしも上手くいっていません。あるいは、世界各地で生じている紛争は、基本的には現在の政治・経済問題に端を発するものであったとしても、積年のルサンチマンの影響が皆無であるとは言いきれないでしょう。

現実において「他者」問題はなお未解決であったり、新たに創出されている状態にあります。先端社会研究所は、こうした他者問題に関する知識を集積し、その解決の一端を探ることを目的に活動してきました。

2010～11年度の2年間は、指定研究として「共生／移動」「景観／空間」「セキュリティ／移動」という3つのプロジェクトを立ち上げ、それらを中心に研究活動を続けてきました。また本研究所では、これら3つのプロジェクトに関連する公募研究、教育支援活動の一環であるリサーチコンペ事業などをおこなっています。本紀要第8号は、これらの関連研究の成果を収めて刊行するものです。

なお、先端社会研究所では2012年度より3年間の計画で、新たに「南アジア／インド班」「日本班」「中国国境域／雲南班」という3つの研究班を指定研究において立ち上げました。昨今における「ヨーロッパの危機」を直接踏まえた訳ではないとしても、アジアという舞台を中心に、西欧近代的な観点だけでは捉えられない知見を得ることを目標にしています。

皆さまの温かい、幅広いご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

2012年7月

関西学院大学先端社会研究所所長  
山口 覚